

つ 常に素人でありつづける

「まちづくりプランナーになるにはどういう勉強をすれば良いですか？」と聞かれることがある。これには困る。なぜなら私自身がどこかの事務所でもまちづくりプランナーとしての修行をしたということもないし、正直、学生時代に都市計画の勉強などまともにしたことがなかった。あえて挙げるとすると歴史的町並みの保存のための住民運動に長く関わった経験があるぐらいだ。

そもそも私が学生だった頃に「まちづくり」という言葉はなく、代わりに都市計画という言葉が一般的だった。その都市計画も一九一九年に制定された都市計画法が、第二次世界大戦後の経済成長を背景にした急激な都市化に対応するために現在の制度に近い形で改正されたのが一九六八年。ちょうど私が大学に入るちよつと前のことだった。都市計画決定への住民参加はこの時から導入されるのだが、大学での授業は新法の概要を解説する程度で、その制度を使つてどのようなまちづくりを進めていくかについて教えるには至っていなかった。

当時の建築や都市をテーマとしたジャーナリズムが積極的に取り上げていたのは、歴史的環境や水辺環境の保全、活用を通じた都市再生の世界的動向だった。また、日本の各地でも歴史的環境や水辺環境を守る住民運動が必死の戦いを挑んでいた。そんな時代の風が大学の授業に届くのはずつと先のことになる。都市計画の制度は一九六八年以降、何度も改正されるのだが、常に、その時その時の都市課題にどのようなスタンスでのぞむかは政策に左右される。一九八八年には再開発の需要を都市計画に取り込むための「規制緩和」の制度が設けられた。一九九二年にはバブル経済による地価高騰などに対処するために住宅系用途の規制の細分化などが制度化されたが、すでにバブルは終焉し後追的になってしまった感がある。

まちづくりプランナーは専門家として都市計画の法律やそれに基づく制度を熟知し、それらを活用しながら地域課題に対処するものとされがちである。私はそれだけで良いとは思わない。その点で言えばまちづくりプランナーは「常に素人でありつづけ」何が本質的な課題であり、それをどのように実現していくかを現場で考えつづけなければならぬのだ。